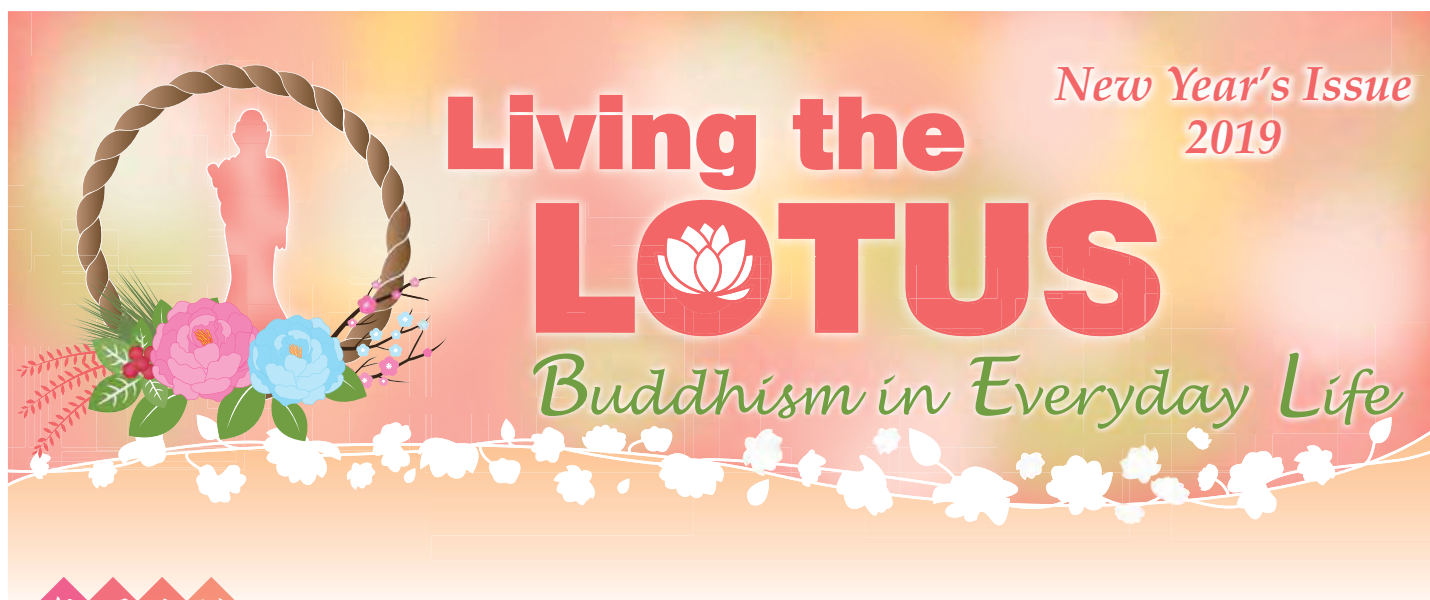




年頭法話

自己を進化してゆこう

立正佼成会会長 庭野 日鏡



「人を植える」ことは将来を見据えた
社会づくり、国づくりの最重要課題

あけまして、おめでとうございます。

昨年は、教団創立八十周年という大きな節目の年でした。今年からは、いよいよ創立百年に向け、皆さまと心一つに、さらなる精進をさせて頂きたいと思っております。

その意味を込め、私は、「平成三十一年次の方針」を次のようにお示しました。

天地自然は、一瞬もとどまることなく、創造、変化を繰り返しています。私たちもまた、天地の道理の如く、^{どうり}停滞^{ごと}することなく、何事に対しても、日々新たな気持ちで取り組んでいくことが大切です。

今年、本会は創立八十一周年を迎えました。その今日に及ぶ歴史の礎^{いしずえ}は、開祖さま、脇祖さまをはじめ、先輩の幹部の皆様、信者^{しんしよく}さんの寝食^おを惜しまぬご尽力によって築かれてきたものです。

私たちは今後、教団創立百年に向けて、一人ひとりが、創造的な歩みを進める確たる志^{かく こころざし}をもって、そのご恩に報^{むく}いてまいりたいと思います。

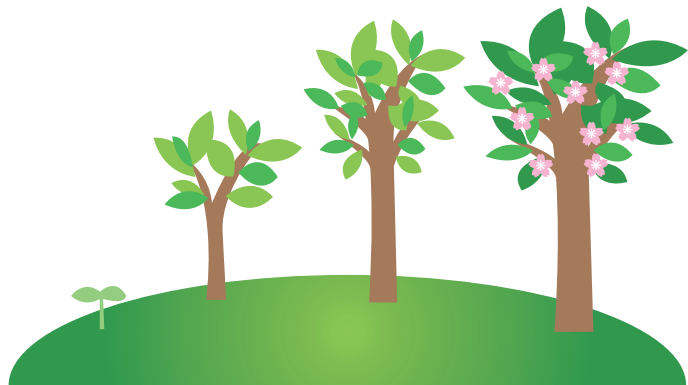
昨年とほぼ同様の内容ですが、このことは、本会会員として、常に大事にすべきことです。

この年次方針の中に「創造的な歩み」という言葉があります。これは、単に「新しいものをつくり出す」という意味ではありません。

仏教は、勝ち・負け、成功・失敗、新しい・古いといった見方を超えた普遍的な価値^{ふ へんてき}を大事にします。つまり、人間の営みに真に力を与えるのは、いつの時代も、明るい心、優しい心、温かい心であります。それを一人ひとりが、家庭、学校、職場、地域、また世界で、惜しむことなく、そして今までの自分から一步踏み出して表現するのが、本当の意味の「創造的な歩み」であると思います。

そうした根本^{こんぽん}を忘れることなく、それぞれの個性をいかして、身近な実践に結びつけてまいりましょう。

私は、教団創立八十周年に際し、来たるべき百年を展望して、「人材育成——人を植える——という根本命題^{こんぽんめいだい}に全力を尽くしていくことが、私たちの大事な務め」と申しました。



「人を植える」という言葉は、中国古代の書物に出てまいります。

以前、年次方針の「付記」でも紹介した「一年計画ならば穀物を植えるのがいい。十年計画ならば樹木を植えるのがいい。終身計画ならば人を植える(育てる)のに及ぶものがない」という一節であります。古くは、「植える」を「樹(う)える」と読んでいたことから、「三樹^{さんじゅ}の譬^{たと}え」と言われています。

人を育てることは、「終身計画」——人間が一生をかけて取り組むべきテーマであり、将来を見据えた社会づくり、国づくりの最重要課題であるということです。

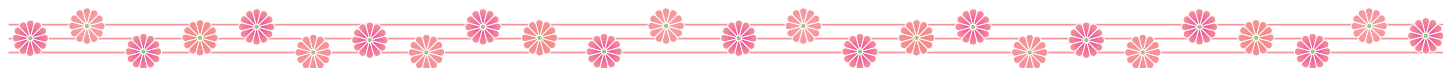
また人を育てることは、大地に一本一本木を植えることになぞらえることができます。もしその木が真に根づいたならば、植えた人がいなくなろうとも、木はどこまでも生長をやめません。そのように、自立して、いきいきと生きる人間を育成する大切さを、「人を植える」という言葉で表わしているのです。

家庭は、人格形成の根本の場。 親の姿が、子供に決定的な影響を与える

そして、現実^{現実}に人を育成していく上で、特に大切にすべきことは、幼少年期からの関わり、つまり家庭での教育であるといわれています。

人間の脳は、三歳ぐらいまでに、大人の機能の八十%まで成長し、五、六歳までには、性格の型^{かた}が決まるそうです。記憶力、注意力は、十二、三歳頃が最も旺盛で、^{おうせい}ほぼ十六、七歳で人間ができ上がるということです。

家庭は、人格形成の根本の場です。本会会員に当てはめるならば、親が、朝夕の読経供養やご宝前へ



のあいさつを通じて、ご本尊に参り、感謝を捧げる姿は、子供に決定的な影響を与えます。また子供が、親の明るく、優しく、温かい心に包まれていたならば、^{おの}自ずと豊かな人間性が育まれるに違いありません。

逆に、日頃、親の心ない言動を見聞きしている子供たちは、自然にそれを真似^{まね}て、受け継いでいくといわれます。また子供を力づくで思い通りにしようとしても、その時は従ったように見えても、反発心^{つの}が募り、心は離れるばかりです。

地面に曲がった^{ぼう}棒を立てておいて、影を真っ直ぐにしようとしても、^{なお}直るはずがありません。棒を真っ直ぐに立てさえすれば、自然に影が真っ直ぐになるのが道理です。

わが子の言動は、日頃の親の姿を鏡のように映し出します。社会における青少年の諸問題もまた、大人の世界の矛盾^{むじゆん}を反映しているといわれます。

大事なものは、子供に期待していることを、まず親自身、大人たちから始めることです。

東洋思想^{たいと}の泰斗として知られた安岡正篤^{まさひろ}先生のご著書に、こんな言葉があります。

「父は子どもの尊敬^{まとう}の的でありたい。母は子どもの慈愛の座でありたい。なぜかなら、家庭は子どもの^{なわしろ}苗代だから」

稲の苗を育てる苗代が整っていなければ、秋の収穫など決して望めないことを心すべきでしょう。

菩薩道を歩むことは、
仏さまが最も願われている人間の生き方

こうしたことを踏まえ、私は、これまで皆さまに「仏さま及び開祖さま・脇祖^{いっく}さまの人を慈しみ思い

やるころ、人間本来のころ（明るく 優しく 温かく）を持って、菩薩道^{じんどう}（人道）を歩んでまいりましょう」とたびたびお伝えしてきました。

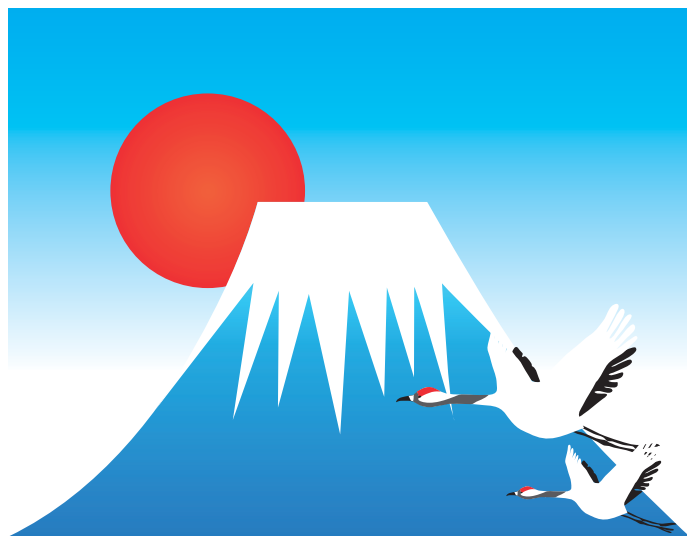
この菩薩道を歩むことが、法華経を通して仏さまが最も願われている人間の生き方です。

菩薩とは、仏の教えをよく信じ、理解をして、仏の境地に向かって精進する決心をした人々のことです。言い換えるならば、菩薩は、仏の心を自分の心としようと励む人々のことです。そして、菩薩の生き方の原動力は、慈悲であると教えられています。

一人ひとりが、菩薩になることを目指していくには、何よりも、自己流ではなく、仏さま流とでも申すべき「ご法の習学」を欠くことができません。

「習学」の「習」の字は、「羽」の下に「白」と書きます。「羽」は鳥の羽、「白」は鳥の^{どうたい}胴体を示す象形文字^{しょうけい}で、^{ひなどり}雛鳥が成長し、巣離れする頃になると、親の真似をして、何度も羽を広げてはばたき、飛べるように稽古^{けいこ}する姿を表しています。

巣立ちを目指す雛鳥のように、日々、仏の教えを正しく会得^{えとく}し、それを自分の日常生活と照らし合わせて考え、このことを絶えず繰り返す——それを通して、次第に仏の心に近づいていくのです。



そうした日々の歩みを親鳥のように見守り、支えてくれるのがサンガにほかなりません。同信の仲間がいることによって、励まされ、教えられながら、安心して修行できるのは、本当に心強く、有り難いことです。

ただ、初心の方の中には、「自分はそんなに立派な人間ではないので、とても菩薩になれそうもない」と尻込みしてしまう人もいるかもしれません。

もちろん人間は誰もが、^{むさぼ}貪り、怒り、愚かさなどの^{ほんのう}煩惱を^{そな}えています。そして普通、煩惱は悪であり、あってはならないと受け取りがちです。しかし実は、煩惱によって生じる悩み、苦しみがあるからこそ、それを何とか解決したいと、^{ぼだい}菩提（悟り）を求める心が起こるのです。

つまり煩惱と悟りは一つであることに、気づく、気づかせてあげることが、非常に大切なポイントであります。

また同時に、人間は誰もが、仏さまと同じ慈悲の心を^{そな}えていると教えられています。

悩んでいる人の相談に乗って、相手が救われると、自分のこと以上に大きな喜びを感じることがあります。人知れずゴミを拾ったり、募金に応じたり、乗り物で席を^{ゆず}譲ったりすると、何ともいえない^{すがすが}清々しさを感じます。それこそ、仏さまと同じ慈悲の心が^{あかし}具わっている証です。

一人ひとりに具わった可能性を信じ、自らが菩薩として生きていこうとする歩み、さらには一人でも多くの菩薩を育てていく歩みを、地道に進めていきたいものです。

さて、^{こう い けいしやう}皇位継承に伴って、本年の四月末、「平成」の時代が幕を閉じます。「平成」という元号は、「^{うち}内

^{たい}平らかに^{そとな}外成る」という中国の古典の言葉が由来の一つとなっています。国も人間も、その内側、内面が平和で穏やかであれば、それは外的な世界に形となって現れてくるという意味合いです。

「平成」の時代に生きてきた私たちは、そうした元号に込められた精神をしっかりと踏まえて、日々の生活にいかすことが^{かんじん}肝心です。

人間の現実世界の問題は、誰かが救ってくれると思って、それを待っていたのでは、解決されません。仏さまが、^{じゆ}地涌の菩薩に法華經の^{ぐつう}弘通を託されたように、現実の世界で悩み、苦しみながら、懸命に生きている名もなき人々の行動によってのみ、解決されると教えられています。

ですから、自分を決して^{ひげ}卑下せず、仏さまの教えを信じ、理解をして、慈悲の心で菩薩道を歩んでいく——それが、私たちの精進の目標であり、法華經の主題であります。

このことを深く心に刻み、今年も皆さまと手を携えて前進していきたいと念願しています。

（『佼成新聞』平成31年1月6日号より）

